

Title	マルチエージェントシミュレーションによる不規則動 詞の規則化に対する人口流入の影響
Author(s)	鈴木, 啓章
Citation	
Issue Date	2015-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/12631
Rights	
Description	Supervisor: 東条敏, 情報科学研究科, 修士

概要

本研究の目的はマルチエージェント環境を用いたシミュレーションで統計的な研究 [?] で示された不規則動詞の規則化現象の追試を行うことである。

ドイツ語やラテン語などをはじめ、人間の言語は様々な屈折体系を持つことで、他者とのコミュニケーションを円滑に行える。英語における時制もその屈折の一つである。動詞に接尾辞「ed」をつければ過去形を生成できるという規則は、新しく英語に加わる動詞にも例外なく適用できる。例えば、google はすでに「google で検索する」という動詞として用いられており、過去形は googled である。しかし、母音交替 (Ex. sing - sang) によって過去形を生成する不規則動詞は例外的な扱いになる。

現在用いられている不規則動詞は Old English 時代の強変化動詞がもとである。Old English 時代では母音交替によるパターンは何パターンか存在したが、現在の不規則動詞の母音交替のパターンは語形そのものが変化、または不変であるパターンを含めればかなりの数が存在する [?]. このように不規則動詞の過去形には明確なルールが存在しないことは明らかである。しかし、現代まで不規則動詞が生き残っているということもまた事実である。その理由の一つは、不規則動詞には使用頻度が高いものが多いということがあげられる。「be, have, come...」などよく登場する動詞は不規則動詞である。実際、英語に存在する不規則動詞は全動詞の約 3% ほどであるが、会話に登場する動詞の約 70% が不規則動詞である [?].

しかし、統計的な研究から使用頻度がそこまで高くない不規則動詞は規則変化をするようになっていくことが明らかになった。規則変化が進行する速度なども同時に示され、過去から未来すべての年代の不規則動詞の数も予想できる。

また、言語の歴史的変化を扱う際には人間のコミュニケーションを考慮することが重要になってくる。なぜなら、言語変化とは言語そのものがもつ特徴と人間のコミュニケーションの目的が複雑に絡み合う現象だからである。本研究では人間のコミュニケーションと言語そのものの特徴を持つマルチエージェントシステムを提案する。